

令和8年産小麦の作況と麦類の当面の技術対策

米麦畜産課
(農産振興室)

生育の概況	播種後の乾燥により停滞気味であったが、まとまった降雨により生育は前進している。草丈は高く、出穂期は平年より早まる見込み。
作業の進捗状況	除草剤散布、赤かび病防除・開花期追肥準備、排水溝の整備

1 気象経過 (前橋橋地方気象台データの平年比、3月は20日まで、参考資料参照)

項目	11月	12月	1月	2月	3月
平均気温	+0.4℃	+0.8℃	+0.2℃	+2.4℃	+1.2℃
降水量	17%	38%	-%	51%	95%
日照時間	111%	108%	113%	101%	114%

2 生育概況

(1) 概要

播種作業は概ね順調に進んでいたが、播種の遅れたほ場では土壌が乾燥していたため、出芽に時間がかかり、出芽後の生育も遅れた。11月中旬から2月中旬にかけて降水量が極端に少なく、乾燥が続いたため生育は停滞していたが、2月下旬以降、まとまった降雨があり、気温も平年より高く推移したことから生育が大幅に前進している。畑麦では乾燥による株の消失や生育の遅れなどの生育不良が一部で見られる。全体的に草丈は高く、出穂期は平年より早まる見込み。

今後、出穂期が早まることが予想されるため、凍霜害の発生や、生育が旺盛なほ場では病害(赤かび病、うどんこ病)や倒伏の発生が懸念される。

(2) 病虫害・障害等の発生状況

病虫害は目立った発生は無い。雑草は、乾燥傾向のため平年より少ないが、スズメノテツポウ、ネズミムギ、ヤグルマギク、ヤエムグラ、カラスノエンドウ、アカザが見られる。

(3) 作況ほ等の調査結果

作況ほ(さとのそら)のデータ平均は、播種期は11月21日(過去平均比+2日遅い)、3月20日現在の草丈が33.8cm(同124%)、茎数が1,184本/m²(同100%)、幼穂長が6.7mm(同147%)となっている。

農業技術センター稲麦研究センターの生育基本調査結果(小麦「さとのそら」、11月14日播種)では、3月20日現在、草丈が31.8cm(過去10カ年平均比114%)、茎数が803本/m²(同84%)であり、幼穂形成始期は3月2日(同+1日)、節間伸長始期は3月15日(同-4日)となっている。

(4) 作柄のまとめ

小麦の作柄は、各地区とも全て「並」であることから、県内の平均作柄は「並」が見込まれる。

表1 小麦作況ほ調査結果（さとのそら）

地 区	播 種 期	2月20日		3月20日		
		草 丈 cm	茎 数 本/㎡	草 丈 cm	茎 数 本/㎡	幼穂長 mm
平 均	11月21日(+2日)	11.5(98)	1,058(99)	33.8(124)	1,184(100)	6.7(147)
前橋市	11月22日(+2日)	9.5(96)	1,022(103)	35.5(147)	1,621(118)	10.0(286)
伊勢崎市	11月24日(+1日)	11.4(99)	1,293(135)	31.9(128)	995(119)	7.4(151)
高崎市	11月21日(+3日)	12.1(97)	729(70)	28.1(103)	825(80)	5.0(87)
太田市	11月25日(-)	9.6(-)	596(-)	26.5(-)	1,447(-)	2.9(-)
千代田町	11月20日(±0日)	12.8(98)	1,187(93)	39.6(122)	1,296(86)	4.5(109)

※各地区の()内は過去の平均値に対する日数および比率(%)。

日数の「-」は早い、「+」は遅いことを示す。

過去の平均値は、前橋市は過去2年、伊勢崎市は同4年、高崎市は同6年、太田市はほ場変更により過去値なし、千代田町は同4年の値。太田市は県平均から除外した。

表2 農畜産課・地域農業課管内の麦類の作柄概況

地 区	県平均	中 部	伊勢崎	西 部	東 部	館 林
作柄概況	並	並	並	並	並	並

3 技術対策

(1) 排水対策

排水対策を未実施のほ場では早急に排水溝等を設置する。実施ほ場においては排水溝の確認や手直し等を随時実施し、ほ場の過湿を回避する。

(2) 追肥（実肥）

パン用小麦品種「ゆめかおり」は、赤かび病の防除との同時作業による尿素溶液4～8%での葉面散布や開花期頃に窒素成分で2～4kgの追肥を実施し、タンパク質含量の向上を図る。

(3) 病虫害対策

麦類のデオキシニバレノール、ニバレノール（赤かび病の病原菌が産生するかび毒）汚染防止のため、赤かび病防除を必ず実施する。各麦種の防除適期は、小麦が開花始期～開花期（出穂7～10日後頃）と開花10～20日後、二条大麦が蒴殻抽出期（穂揃期10日後頃＝出穂12～14日後頃）、六条大麦が開花始期～開花期（出穂3～5日後頃）である。

うどんこ病やアブラムシは、発生状況に応じて防除を行う。「つるぴかり」「きぬの波」はうどんこ病に弱く、過繁茂のほ場で発生しやすい点に留意する。

(4) 雑草対策

収穫物への種子混入が問題となるカラスノエンドウ等は確実に処理する。カラスムギやネズミムギ等の難防除雑草は、周辺ほ場への拡散や翌年の多発につながるため、発生量が少ないうちに抜き取りを行う。ほ場をよく観察し、殺草限界前までに適切に処理するとともに、除草剤の使用晩限を超えないよう注意する。

(5) 凍霜害対策

出穂期までの低温危険期の天候に留意する。小麦は幼穂長3mmのときに-2℃以下、20mmのときに0℃以下の低温で幼穂凍死が発生する。幼穂凍死は低温日から4～5日後の幼穂の変色や新葉が抽出したときの黄化症状などにより確認できる。また、幼穂が凍死すると遅れ穂が発生するため、収穫時期に留意するとともに、調製を丁寧に行い、未熟粒の混入を防止する。

不稔粒は、出穂8～10日前の-1℃以下の低温遭遇や、出穂前後の降霜などにより発生する。不稔粒は赤かび病の発生を助長するため、適正に防除を行う。

【参考資料】

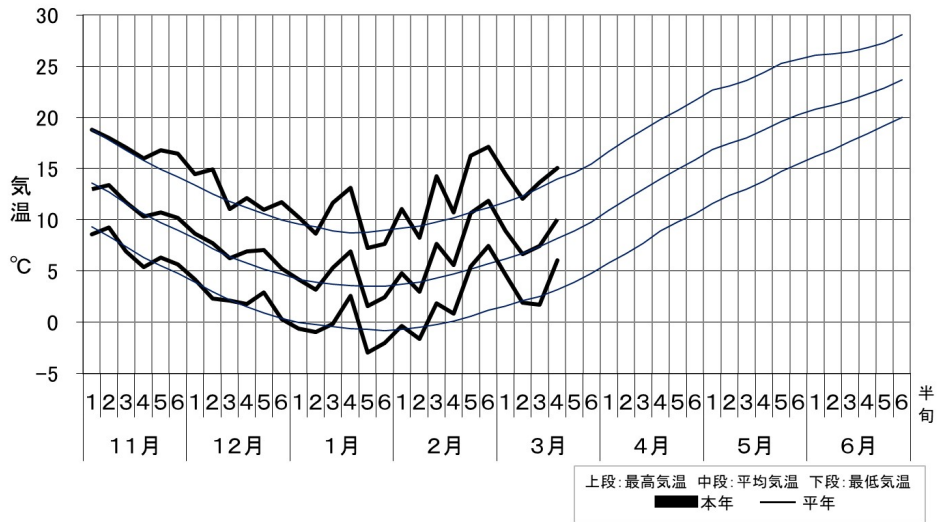


図1 麦作期間の気温（前橋地方気象台）

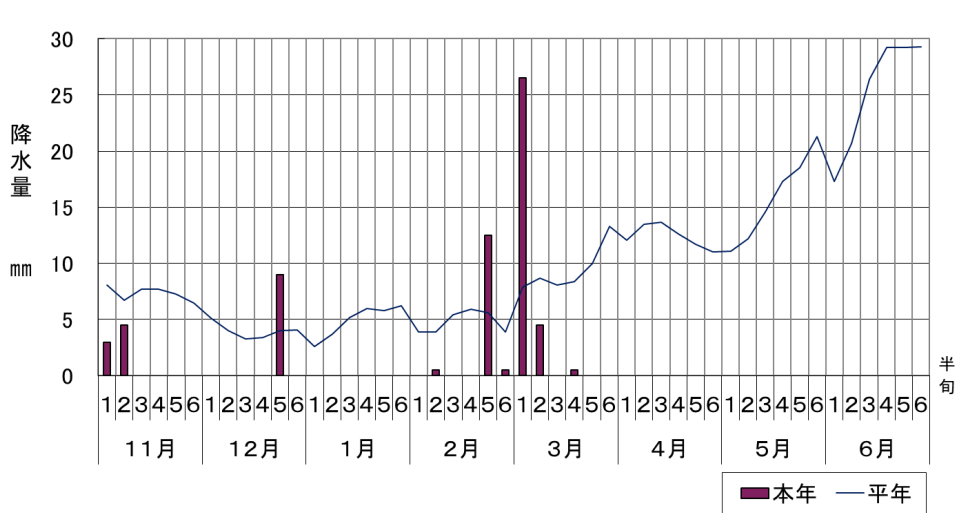


図2 麦作期間の降水量（前橋地方気象台）

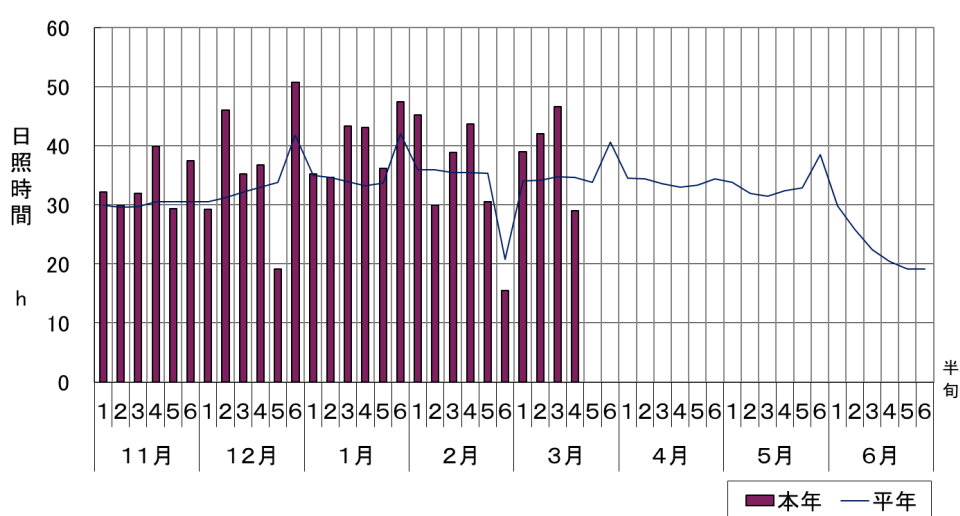


図3 麦作期間の日照時間（前橋地方気象台）